

第145回

なぜか3人組が人気を博した 昭和のガールグループ

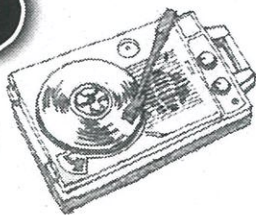
近年のNHK紅白歌合戦の出場者は紅組白組ともほぼ半数がグループやユニットでの出場になっていますが、振り返れば、紅組の場合、昭和34年にザ・ピーナッツが出演して以降、キャンディーズが「年下の男子」で登場する昭和50年までの16年間、洋楽カバー曲を品良く歌うスリ・グレイセスと「イヤーかなわんわ」などのトリオこいさんずが昭和37年と38年に2回ずつ出場したのみで、女性だけで構成されるグループはザ・ピーナッツ以外にほとんど出場していません。されど紅白出場や大ヒットの記録とは無縁でも、昭和とともに甦る3人組ガールグループは数多く存在しました。

昭和44年、平日深夜に聴いていた『ザ・パンチ・パンチ・パンチ』から初代パソナリティの3人娘（モコ、ビーバー、オリーブ）が『わすれたいのに』というバラードでレコードデビュー。この8年後に大瀧詠一がオリーブ役だったシリア・ポールに『夢で逢えたら』を提供、間奏に

入る台詞がラジオ時代のオリーブを思い出させてくれました。
昭和47年には同じくニッポン放送

名曲カルテ

昭和歌謡と いままで



堀井六郎
絵・松本浦



『コッキーポップ』から出てきて『サルビアの花』を歌った、青山学院の女子大生3人組・もとまろの清楚な歌声にも魅了されたものです。

昭和50年代に入ると、人気絶頂だったキャンディーズとピンククレディの2大グループによって、新たな潮流が生まれます。歌だけでなく、セクシーさを強調する超ミニ衣装に脚線美を生かした振り付けを加え、パフォーマンスの魅力で売り出す戦略の始まりです。

先頃、引退宣言を発した野球漫画の大御所、水島新司原作の『野球狂の詩』が昭和52年に実写映画化、その主題歌に採用されたのが女性3人組アパッチのデビュー曲『恋のプロックサイン』でした。同曲では抑え気味だったセクシーさは、『ギンギラギンにさりげなく』に似たりつくりの第2弾『あまったら』で全開。

昭和53年に『マグネット・ジョーに気をつける』を小ヒットさせたギヤルという3人組も捨てがたいですね。この曲は黒木真由美、目黒ひとみ、石江理世という「スター誕生！」出身の女性アイドルだった3人をユニットにして再デビューさせたグループの第2弾シングルで、近年、ミッツ・マンングローブら女装家3人のユニット「星屑スキャット」がカバーし、オリジナル以上のパフォーマンスで昭和歌謡のディープなファンを喜ばせてくれています。

昭和59年には「オールナイトフジ」のおかわりシスターズと、ジャニーズ事務所所属だったオレンジ・シスターズがデビューしています。

翌60年にはユニークなユニットが2組登場。『恋のバッキン』のオナツターズと『背中を御用心』のピンクキャンディーズです。前者の中央で歌っていたのはダウンタウンの浜ちゃんの奥さん、小川菜摘でした。

後者はにつかつロマンポルノの若手女優三人（小田かおる、青木琴美、井上麻衣）のユニットで、グループ名の「ピンク」はピンク映画とのダブルミーニングだったのでしょうが、同曲に扇情的なものは感じられず、過剰な期待は禁物ですので、御用心。